

愛知県美術館はこの秋、「生誕100年 ジャクソン・ポロック展」を開催します(11月11日 - 来年1月22日)。それに関連してお届けしているこの「ポロックの足跡を訪ねて」シリーズ、第3回の今回は、カリフォルニア州チコです。



▲ チコの看板(2006年撮影)。

1912年1月28日にワイオミング州コディに生まれたポロックは、実際のところその街には1年足らずしか住みませんでした。同年11月28日、ポロック家はコディを離れます。そしてカリフォルニア州サンディエゴやアリゾナ州フェニックスを転々とした後、1917年、5歳の時にやってきたのがカリフォルニア州チコです。



▲ チコの看板のそば(2006年撮影)。右手は果樹園。



▲ チコ市内、ポロックの家があったサクラメント・アヴェニューの某果樹園(2006年撮影)。残念ながら、ポロックの家は残っていない模様。

チコはサンフランシスコから北に約 280km 上がったところにあるのどかな街です。辺りには昔から果樹園がたくさんあって、今も果物栽培が盛んです。



▲ カリフォルニア州立大学チコ校(1887年創立)のキャンパス(2006年撮影)。



▲ チコ博物館(2006年撮影)。

チコは小さな街ですが、大学も博物館もあります。また、アートも盛んで、ギャラリーやスタジオがけっこうあります。とりわけ特徴的なのはパブリック・アートで、街のあちこちに作品が設置されています。そんなわけで、チコは2002年には「アメリカの小さなアートタウン、トップ100」に選ばれてもいます。



▲ サクラメント・リバー(2006 年撮影)。



▲ イースト・ハンプトンのアカボナック・クリーク(2008 年撮影)。

ポロックの家があったサクラメント・アヴェニューをしばらく西に行くと、サクラメント・リバーにぶつかります。ポロック家の子どもたちは、夏には時折ここまで足を伸ばして水遊びを楽しんでいました。

私が 2006 年にサクラメント・リバーを訪れた時、どこかすでに見知った場所であるような感覚を覚えました。すぐに気づいたのですが、ポロックが人生最後の 10 年を過ごしたニューヨーク州イースト・ハンプトンの彼の邸宅の近くにある川のような入り江、アカボナック・クリークになんともなく雰囲気似ていたのです。だとしたら逆に、ポロックがイースト・ハンプトンにやってきてアカボナック・クリークを目にした時には、かつて彼が少年時代を過ごしたチコのサクラメント・リバーを思い出したのではないのでしょうか。ポロックは、1946 年に描いた一連の 8 点の絵画を、その入り江の名前を取って「アカボナック・クリーク・シリーズ」と名付けています。そのことから分かるように、彼はその入り江を気に入っていましたが、それにはチコのサクラメント・リバーの思い出も重ねられているような気がします。

(T.O.)